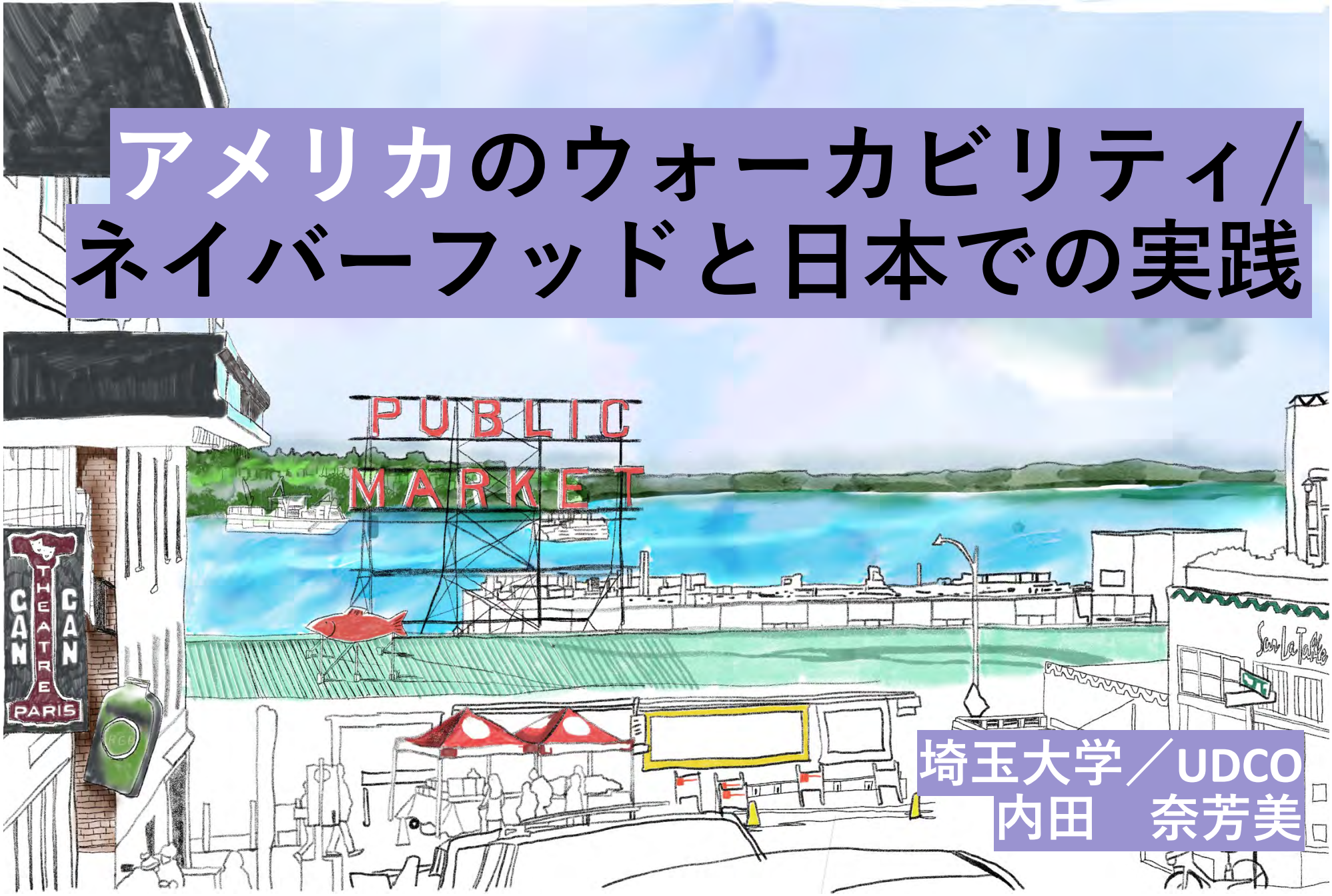
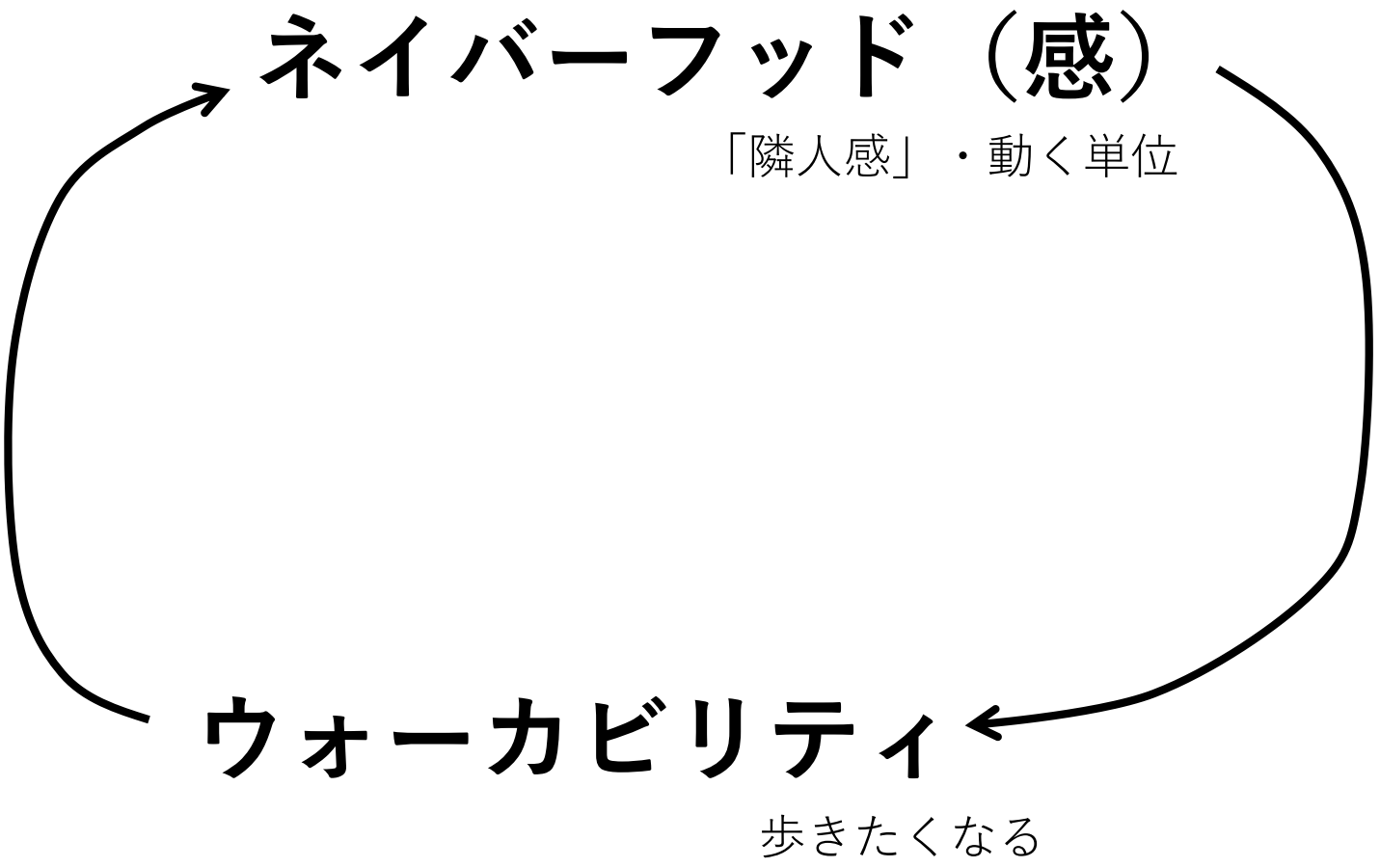
2023/02/09

アメリカのウォーカビリティ／ネイバーフッドと日本での実践



埼玉大学／UDCO
内田　奈芳美


ネイバーフッド（感）
「隣人感」・動く単位
ウォーカビリティ
歩きたくなる

1.ウォーカビリティ(歩きたくなる)

ウォーカビリティがなぜ重要か
(『ウォーカブル・シティ入門』Part1参照)

- 優秀な従業員を惹きつけること
- 不動産の**価値を高める**こと
- (ガソリン代を)節約したお金が**地域内循環**に振り替えられること
- **健康**(肥満、ぜんそく)
- **孤独感**を防ぐ

『ウォーカブルシティ入門: 10のステップでつくる歩きたくなるまちなか』(2021)Jeff Speck
"Walkable City"

アメリカでウォーカブルな都市ランキング(2021)by walk score

https://www.walkscore.com/cities-and-neighborhoods/

- 1　サンフランシスコ(CA) 87万人
- 2　**ニューヨーク**(NY) 823万人
- 3　ボストン(MA) 66.7万人
- 4　シカゴ(IL)269.7万人
- 5　ワシントンDC 70.5万人
- 6　マイアミ(FL)46.8万人
- 7　オークランド(CA)42万人
- 8　フィラデルフィア(PA)156.7万人
- 9　**シアトル**(WA)73.7万人
- 10　ロングビーチ(CA)46.7万人

※「コロナ後」の都市への論説

（論文：メディアで2020/3~5月に語られた「都市の未来」）

(1)集団が利用する交通から個人の交通手段へ△

(2)郊外への移住✓△

(3)オンラインと柔軟な職場✓

(4)環境に優しい復興と成長

(5)高質で柔軟な住宅

(6)監視テクノロジーの拡がり△

(7)小さなビジネスの消滅✓ △

(8)中心部が手頃に×

(9)公共空間の死と生✓

(10)都市集積のしぶとさ✓

Pojani.D,Alidoust.S (2021)「Lest we forget: media predictions of a post-Covid-19 urban future」Journal of Urbanism：International Research on Placemaking and Urban Sustainability, p.6 “Table 2. Major themes and subthemes in the media discourse.”翻訳

ニューヨーク市(NYC)のコロナ禍の空間変化とウォーカビリティ：アウトドアダイニング

マンハッタン・チェルシー

アウトドア・ダイニング

- **タクティカル（戦略的）アーバニズムの文脈：**

カウンター的運動→**メインストリーム**化

コロナ禍で加速し、空間として都市景観を一変

※NYCでは以前から認めていたが、許可するエリアが限定されており、数は1/10程度、ほとんどがオープン型だった

ロウアーイーストサイド

ミッドタウン

全米の動き（人口top10+シアトル）

建築学会都市計画部門研究懇談会資料(2022)p.35

都市名	プログラム名／特徴
1.NY	**「Open Restaurants」**
2.LA	L.A. Al Fresco／無料で占用可・**材料も市から提供**
3.シカゴ	Expanded Outdoor Dining／複数店舗の協力で道路閉鎖も可能
4.ヒューストン	More space ／**ダウンタウンの路面電車の通り（Main St）を閉鎖**、車道に屋外空間を設置
5.フェニックス	Temporary Outdoor Dining ／**住宅地に近接したところでは不可**
6.フィラデルフィア	プログラム名無し／恒久化にあたり安全対策等費用と迅速な撤去可能な設えを条件とした
7.サンアントニオ	Eat on the Street／世界遺産都市事務局とのパートナーシップによるプログラム
8.サンディエゴ	Temporary Outdoor Business Operations・（恒久化後）Spaces as Places／キャノピーは禁止
9.ダラス	プログラム名無し／パークレット実施のために**駐車場設置義務を緩和**
10.サンノゼ	San Jose Al Fresco／落書き、ゴミ、植物などメンテナンスにも言及したプログラム
18.シアトル	**「Safe Start」**

NYC “Open Restaurants”

- NYCでは**外食産業**が市の売上税の**15%**を占め地域経済に重要な役割を果たしている。 https://www.osc.state.ny.us/press/releases/2020/10/dinapoli-restaurant-industry-critical-new-york-citys-economy
- NYC内で**プログラム利用は12,613件(コロナ前1,224件)**

そのうち車道のみ利用は1316件、歩道のみ利用は4562件、両方の利用は6375件(2020/9/12時点)

Outdoor Dining数データ：
https://experience.arcgis.com/experience/ba953db7d541423a8e67ae1cf52bc698

https://www1.nyc.gov/site/planning/plans/open-restaurants/open-restaurants-overview.page

ウェストビレッジ

恒久化に向けた課題

- 住民からの市に対する訴訟(NYC)

  訴状での意見例： https://iapps.courts.state.ny.us/nyscef/ViewDocument?docIndex=R_PLUS_Sl/qe_PLUS_U5tLaj8lPcE7hg==

  -歩道を歩いているだけでレストラン利用者か聞かれた

  -路上にゴミが積み上げられている

- 公共空間の「**プライベート化**」 の加速：

  -不動産価値が高い地域での公共空間の価値享受への権利

  -「**レストラン化**」が加速するマンハッタン

→恒久化に向けた

デザインガイドラインの設定

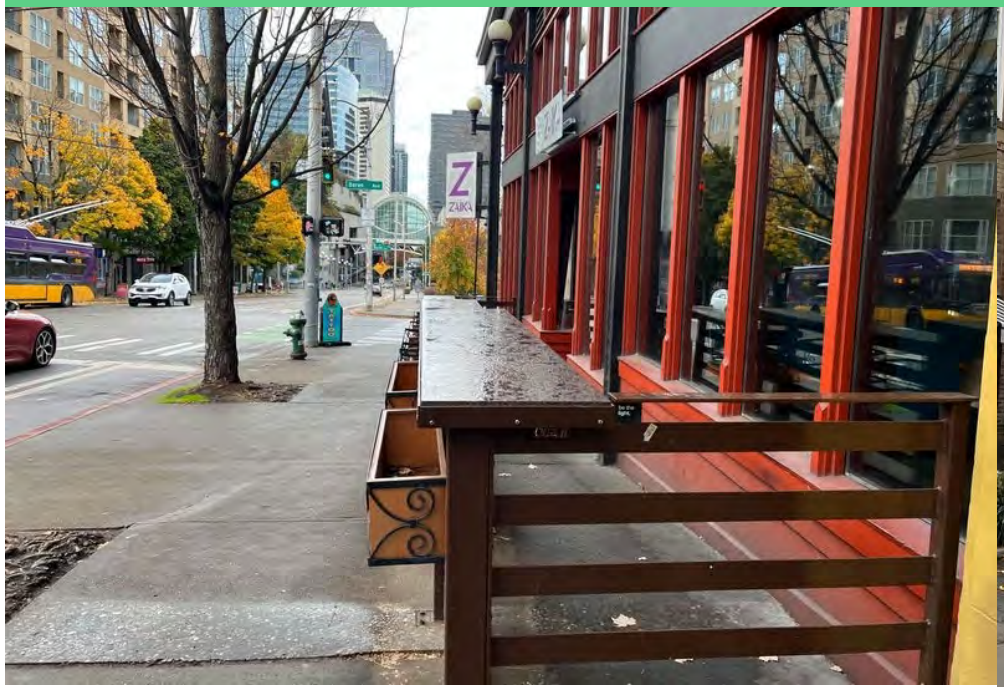
https://www1.nyc.gov/html/dot/html/pedestrians/openrestaurants.shtml

個人ブースパークレット型

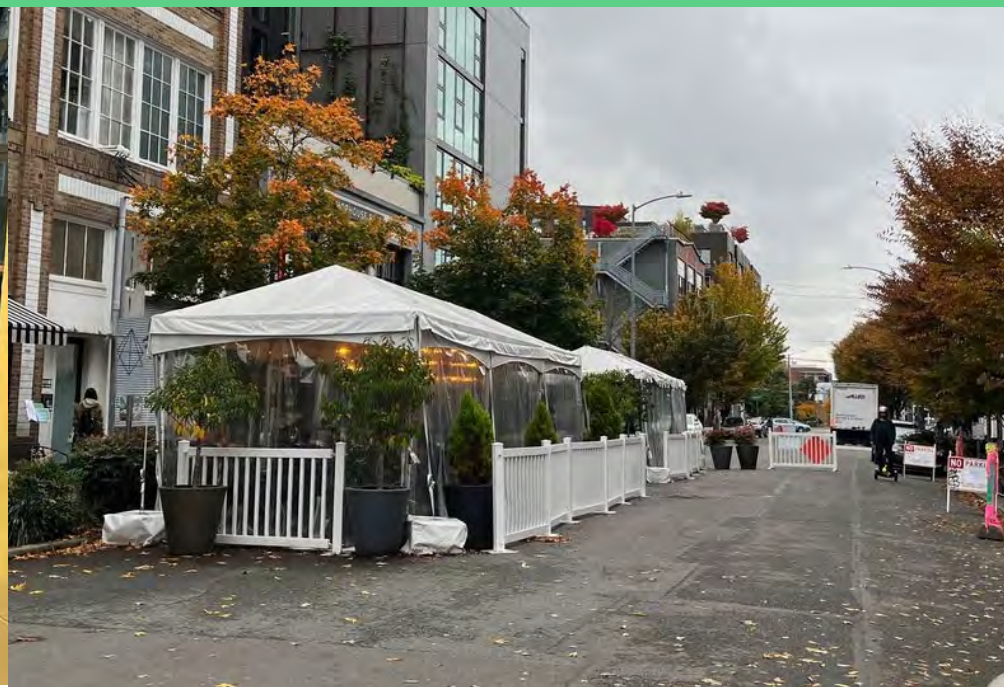
オープンエア型

参考：シアトル

完全立ち飲み型



道路閉鎖連動型



2.ネイバーフッド

「ネイバーフッド（感）」を見直す

シアトル: City of Neighborhoods

近接して住む「**隣人感**」のコミュニティ

&計画参加のための基盤

&特性としての一体性とウォーカブルな拠点

（**アーバンビレッジ**）

“Seattle 2035 Comprehensive Plan” p.31

シアトル：アーバンビレッジ戦略

(1994～)→ウォーカブルな範囲での近隣をつくる

アーバンセンター	ハブ・アーバンビレッジ	住居地域型アーバンビレッジ
“Seattle 2035 Comprehensive Plan”		
複合した用途、住宅、雇用の機会を提供する	住宅と雇用のバランスが取れた地域	商品やサービスの供給を行うが、雇用機会は多くない
Downtown	Ballard	Roosevelt

20年後のアーバンビレッジ戦略の検証(1994→2014)

PETER STEINBRUECK　“SSNAP REPORT 2014”(2014)p.6から引用、訳

- 20年間にシアトルの**住宅と雇用の総成長の75%**がアーバンビレッジに誘導された。

  ※都市計画ポリシーとゾーニングによる誘導。

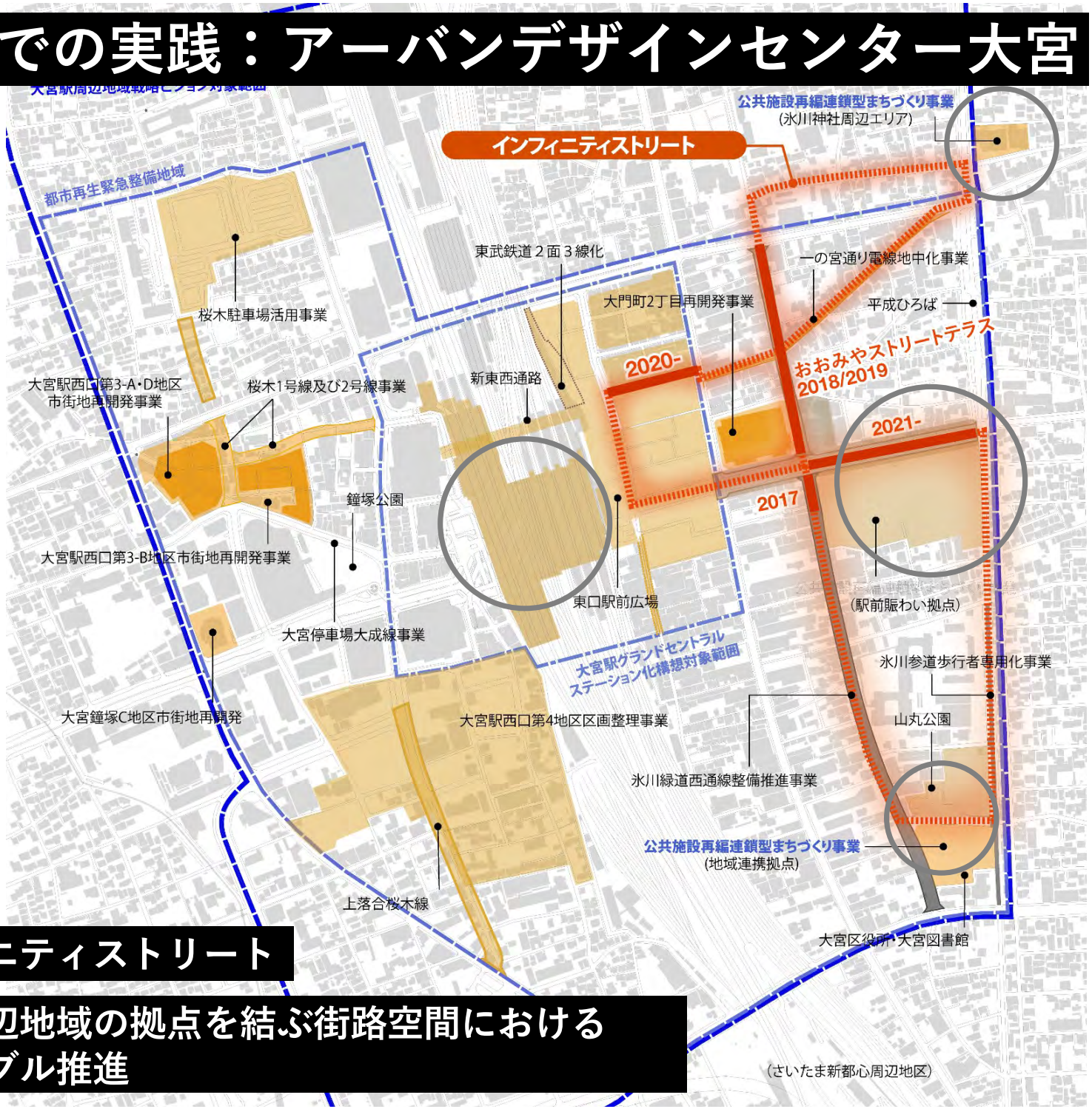
  アーバンビレッジによって成長に偏りがある(Ibid.p.41)

  ※雇用成長と住宅戸数のバランスをとるために

  信頼できる公共交通が必要 (Ibid.p.40)

- ほぼすべてのアーバンビレッジで**公共交通機関の利用者数が大幅に増加**しており、車への依存度を下げ、成長に（よる混雑に）対応している。
- 都市の自然環境を育成し、埋立ゴミを減らし、**エネルギーと水の消費を抑制**することに成功している。

3.日本での実践：アーバンデザインセンター大宮



インフィニティストリート

大宮駅周辺地域の拠点を結ぶ街路空間における
ウォーカブル推進

2017

2020

2018

2021

2019

2022
MIYA
STREET
TERRACE
おおみやストリートテラス

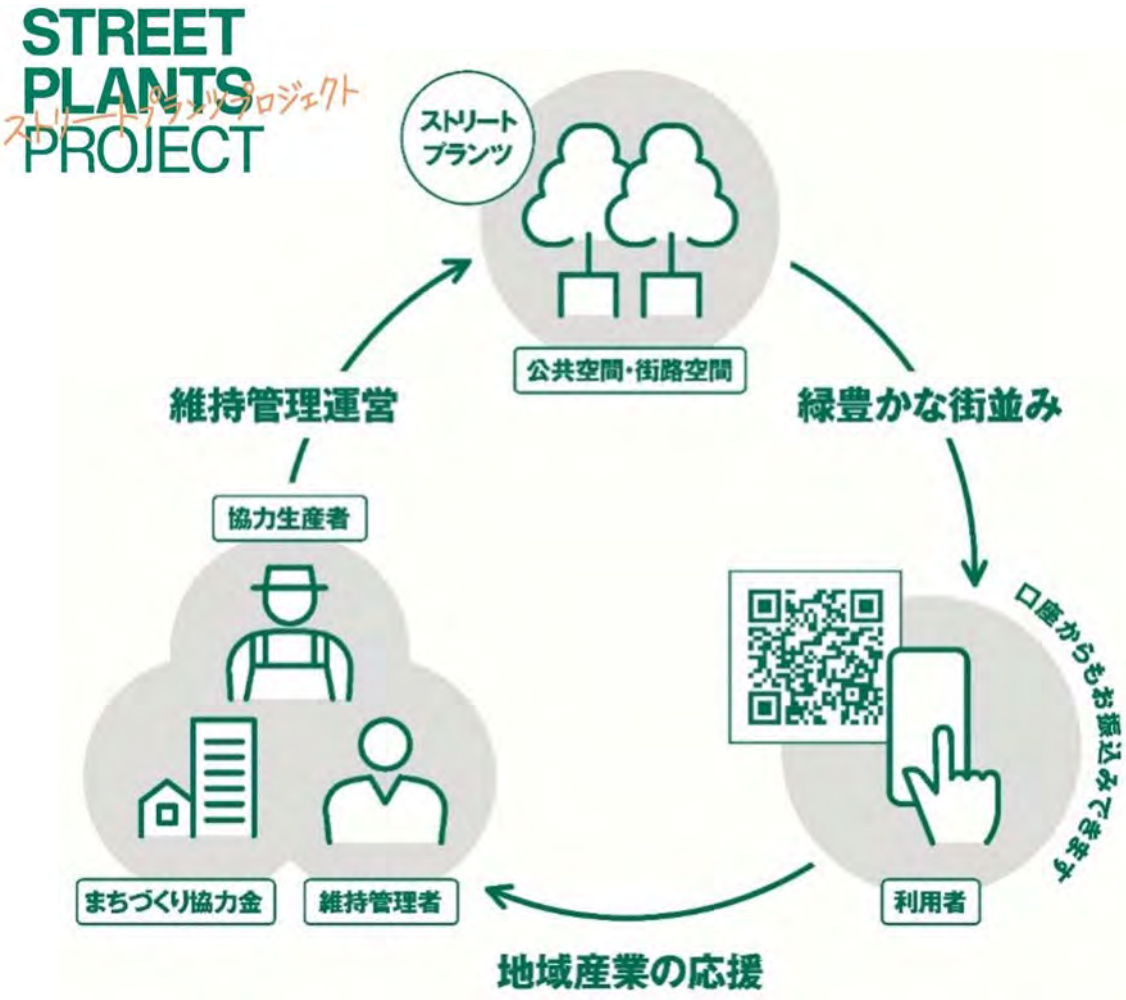
OMIYA STREET TERRACE

@一番街

［コロナ特例占用］

STREET
LUNCH
甘さスッキリ
手づくり
レモネード
¥350
カレー食堂
パプリカ
野菜たっぷり
キーマカレー
お肉ごろごろ
野菜シチュー
おおみやストリートテラス
OMIYA
STREET
TERRACE
PIZZERIA
FELICE
Sunny's

STREET
PLANTS
PROJECT
STREET
PROJECT



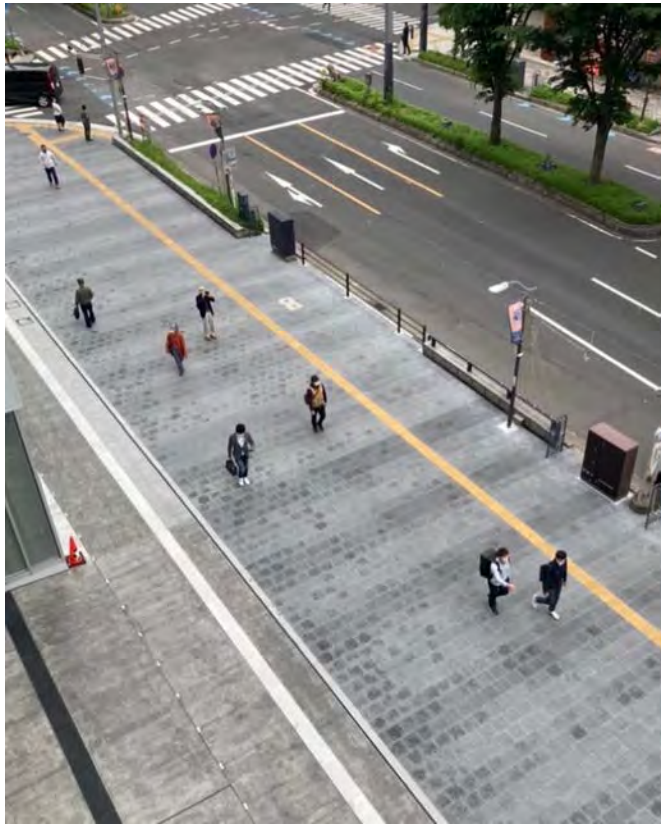
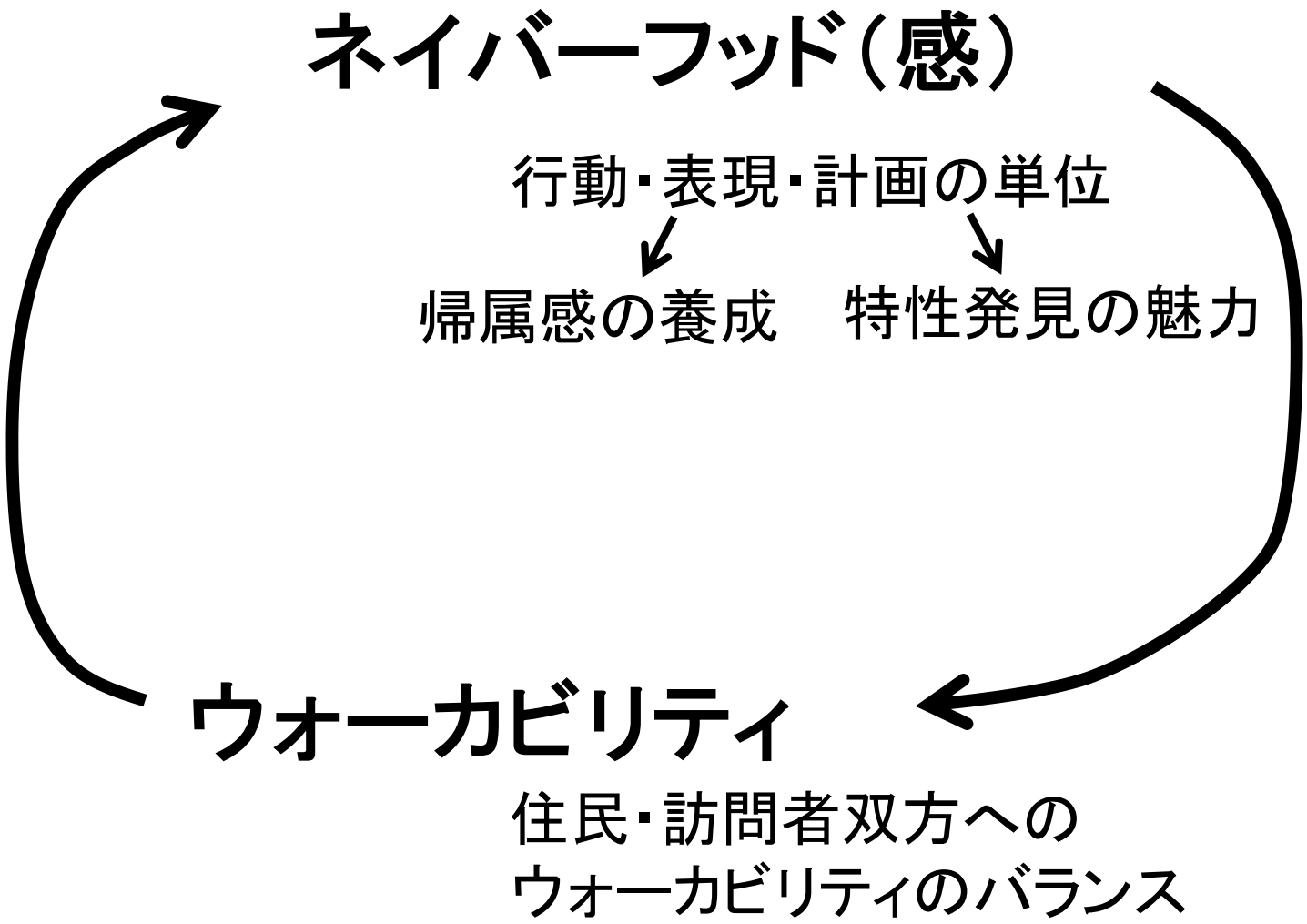
[協賛/購入によって頂いた資金]

→ 協力生産者へ（協力費）

→ 維持管理者へ（維持管理費）

→ エリアプラットフォームへ（運営費）

SS
ストリート
デザイン
スクール
@大宮
STREET
DESIGN
SCHOOL
@OMIYA



「循環」を意識してつくっていく